

# メキシコのディアス政権期における女性と教育

松久玲子

## もくじ

### はじめに

1. ディアス政権期における近代教育の形成
  - (1) ディアス政権と近代教育の枠組みの形成
  - (2) ディアス政権期の公教育の実態
2. ディアス政権期の女性の教育
  - (1) ディアス政権期の女性の社会状況
  - (2) 女子公教育の発展
3. 女性の教育とフェミニズム運動
  - (1) フェミニズムの潮流
  - (2) フェミニズム運動を支えた女性たち
  - (3) 「尊厳のフェミニズム」と教育
  - (4) ドロレス・コレア=サパタと「公民教育」

### 結び

## はじめに

ポルフィリオ・ディアスが政権を握った19世紀末からメキシコ革命までの時期に、メキシコの近代教育の道筋が整えられた。ディアス期に成立した教育制度は、さまざまな要因からメキシコ全土に普及するには至らなかったが、メキシコ革命期および革命後の国民国家形成の先鞭をつけ、国民教育の見取り図を描いた。

ディアス独裁政権のもとで、独立後はじめて得た政治の長期安定を背景に、

メキシコは欧米の制度と文化、技術を積極的に導入して経済発展を成し遂げた。近代化の過程で社会階層として中間層が拡大形成し、既存の社会構造に変化が生まれた。国民の半分を占める女性たちも、この社会的変化に大きな影響を受けた。女子中等教育発足後に生まれた専門職女性や女性教員たち、そして産業化の中でタバコ工場や繊維工場で働く女工たちが増大した。こうした社会的変化は女性の意識変化をもたらし、結果としてメキシコの第一波フェミニズム運動が形を現わし始めた。

近代教育の申し子であるメキシコのフェミニズム運動は、世紀の転換期にあたり社会に必要とされる新たな女性像を提示しようとした。近代教育の鑄型が作られたディアス政権期において、女性はどのように位置付けられ、いかなるジェンダー役割を引き受けたのだろうか。ディアス政権期の新しい教育の方向付けがフェミニストを生むと同時に、フェミニズムが新しい教育制度の理念にどのような影響をおよぼしたかに焦点をあて、既存の社会の再生産装置、また新たな社会規範を仕掛ける装置としての教育において、新たな女性像、新たなジェンダー役割がどのように構築されたかを考察する。

## 1. ディアス政権期における近代教育の形成

### (1) ディアス政権と近代教育の枠組みの形成

メキシコ独立以降の混乱期を乗り越え、自由主義的改革（レフォルマ）を遂行したベニート・フアレスの死後、政権を引き継いだレルド政権を、ポルフィリオ・ディアスが1876年に武力により打倒した。ディアスは、フアレスとともに改革戦争を戦い、また、フランス軍の侵入に対してゲリラ戦を指導して戦った英雄だった。ポルフィリオ・ディアスによる事実上の独裁体制は1876年から1910年までの35年におよんだ。独立後初めて達成された政治的安定の上に、メキシコでは外国資本が導入され、特定の民族資本家や地主たちに優遇措置が取られ、急速な近代化と経済発展を成し遂げた。しかし、それは、大多数の民衆層の犠牲の上に達成されたと言われている。

メキシコの近代化に対するディアス政権の功罪をあげるとすれば、まず、プラス面では、全国に鉄道網が敷かれ、石油をはじめとする地下資源の開発が進み、工業が発展したことである。また、砂糖、綿花、コーヒー、サイザ

ル麻、ゴムなどの商品作物を生産する大規模プランテーションが出現し、教育の近代化が行われ、中産階級が台頭した。マイナス面では、外国資本と特定民族資本への優遇措置により達成された経済発展の見返りとして、富が極端に偏在する結果を招いた。経済的繁栄は先住民を含めた過半数の国民を犠牲にして成り立ち、台頭した中産階級に制度改革が十分対応できなかった。こうした社会的不満を押さえるために、ルラーレスと呼ばれる広域治安警察部隊と軍隊が強化され、ディアス体制に反対する人々への政治的抑圧の道具となった。(国本; 2002)

ディアス政権を支え近代化政策を担ったのは、コントの実証主義に影響を受けたシエンティフィコス(開明派官僚)と呼ばれた啓蒙的エリート官僚たちだった。皆川は、ディアス時代の教育について「メキシコの政治家や官僚は、メキシコ人を統治し行政したのではなく、外国人投資家のために社会・経済政策を推進したのであった。このような社会体制の下では、国民のための教育が政治関心のなかに入ってくるはずもないのであった。もしあのパークスの言うシエンティフィコスの政策の背後にある人種差別観を肯定するならば、ディアス政権の教育政策は、『民衆を無知蒙昧に止めておく』という一点につきるといえよう」と述べている。(皆川; 1975、252-257)シエンティフィコスのもつ「国民」の概念の中に、貧しい農民、インディオ層は実質的に排除されていたかもしれないが、シエンティフィコスの中でも常に進歩的な位置にいたホアキン・バランダ(Joaquín Baranda)とフスト・シエラ(Justo Sierra)は、教育を通じてのみ真の国民的統一が可能だと考え、進歩主義的な教育政策を実施し近代教育制度への布石を敷いた。(Larroyo; 1976)メキシコ革命以降の教育制度にもシエラの政策が踏襲された。

1982年に法務教育相となったバランダは、統一国家の国民を育成するには、一定の基準と目標と枠組みを持つ初等教育の普及が必要だと考え、小学校教師の育成のために教員養成に取り組んだ。1885年に師範学校設立令が施行され、1887年にはメキシコ市に師範学校が開設され、同時に付属の小学校と幼稚園が併設された。<sup>1</sup>

1888年には義務教育法(la Ley de Instrucción Obligatoria)が公布された。それまでのメキシコでは、州、市政府、あるいはランカスター協会、教会の

経営する学校などのさまざまな形態の初等教育と学校経営が行われていたが、義務教育法により中央集権的統一学校制度が構想された。義務教育法では、「初等基礎教育は、6歳から12歳の男女児に対し、連邦地区および諸地方においてこれを義務とする。この教育は、公のもしくは特殊のいかなる施設もしくは私的施設においてもこれを受けることができる。」と定められた。教育は、未成年者の親権を持つ人間が責任を負うとされた。また、特例として、工場、作業場、アシエンダ、ランチョの所有者は、公的学校の証明あるいは当局によって要求された方法で、当該の児童が初等教育を受けていることを証明しなければならなかった。これに違反した場合には10ペソの罰金か、1日から2日の禁固刑が科せられた。初等教育は初等科と高等科に別れ、州立の小学校は無償で、市などの地方自治体の設置する学校には補助金が交付された。学校のない地域では、巡回教師（maestros ambulantes）が初等教育を実施した。義務規定により、1891年3月には連邦地区および諸地方における義務教育施行規則（Ley Reglamentaria de la Instrucción Obligatoria en el D.F. y Territorios）が施行され、視学制度が確立した。

バランダは、法律の施行だけでは統一的な教育を実施することは不可能と考えた。州知事に呼びかけ、各州2名ずつの委員が参加し、1889年12月1日に第1回教育会議が開催された。義務教育法の規定にしたがい、共和国の各州の制度、立法や教育規定の統一を図り、義務教育の普及を促進しようとした。会議の主要な作業は、初等教育、大学準備教育（プレパトリア）、専門教育の3レベルにおいて教育の統一を図ることであった。第1回会議では、初等教育についての統一見解<sup>2</sup>が出されたほかに、農村教育、幼稚園と成人学校、労働学校の必要性についても論議された。1890年12月1日から1891年2月28日に開催された第2回教育会議では、教員養成、大学準備教育（プレパトリア）、法学、医学、美術、実業などの職業教育が論じられた。師範学校の教育計画について論じられたなかで、「女子師範学校の組織はどうあるべきか」が諮問され、第1回会議に付け加えられた点として、女子教育の性質、目的、限度についての議論が要請された。

バランダは、1901年に教育相を辞したが、教育会議の実行委員長であり、その後の教育担当副大臣を務めたフスト・シエラが、バランダの教育政策を

継承した。1901年には、学習計画、規則、プログラム、教育方法とテキストなどについての諮問機関として公教育審議会（El Consejo de Educación Pública）が設置された。初等教育、師範教育、専門学校担当長、障害児教育長、官僚をメンバーに加えて他の分野の専門家など20名から構成されたが、設立の趣旨はあらゆる段階とタイプの教育を単一の継続的な監視のもとに置くことだった。

1905年に公教育文化省が設立され、シエラが公教育文化大臣に就任した。シエラの下で、1908年8月15日に連邦区および地方初等教育法が公布された。ここで、教育は無償、無宗教、義務であり、さらに総合的かつ国民的であるべきであるとされた。「総合的」とは、身体的、知的、倫理的であることを意味し、国民的とは、メキシコ市民として「国家の発展と住民の完成に貢献する目的とともに祖国メキシコとその制度への愛を発展させる」と規定されている。シエラは、教育は国家の役割だと考え、女性の教育に関しても重要だとする立場をとった。教育の連邦化に尽力し、国立人類学歴史学研究所（INAH）の前身や国立大学を設立した。

ディアス政権期には、バランダとシエラにより、メキシコ革命を経た後も継承された教育制度の枠組みが完成した。無償、義務、非宗教という近代的公教育の特徴が確立され、初等教育、大学準備教育（プレパトリア）、高等教育、教員養成、専門・職業教育と成人教育を包括する学校教育の制度的枠組みが作られた。

### （3）ディアス政権期の公教育の実態

バサントは、ディアス政権の教育について教育の理想と現実との間の隔たりを指摘し、「教育は質において勝利をおさめたが、量的には成功しなかった」と述べている。近代教育の制度的枠組みが作られたが、その恩恵にあずかったのは国民の一部だった。（Bazant;1993）

1857年の小学校の学齢人口1,557,403人に対し、就学者数は185,757人で就学率はわずか11%に過ぎなかった。1875年において、約180万人の学齢児童のうち就学しているのは19%の34,9001人だった。ディアス政権期の30年間の間に、就学者数は表1に示すとおり2倍以上に増大している。（Meneses

表1 小学校就学児童数の推移

年度	総人口	就学者数	公立学校就学者数	私学校就学者数
1857	7,661,919*	185,757		
1875	9,481,916**	349,001		
1878	不明	246,271	220,768	25,503
1900	13,605,819	741,379	598,252	143,127
1907	14,331,188***	848,489	673,609	174,880

\* 1852年総人口、1857年の学齢人口は1,557,403人

\*\* 1877年総人口

\*\*\* 1905年の総人口

Martínez Jiménez;1996, 333, Meneses Morales;2001, 849より作成。

Morales;2001,851)しかし、同じように総人口も1.5倍に増加していることを考えれば、量的に拡大したとは言え、まだ学校教育を受けられない人口が圧倒的に多いと考えられる。バサントは、1907年の時点で学齢人口は2,725,963人で就学人口は776,612人、就学率は31.86%と推計している。(Bazant;1993, 93)

また、識字率を見てみると独立直後には人口の99.38%が非識字であり、識字人口はわずか0.6%だった。(Meneses Morales;2001,848)ディアス時代でも識字率は表2に示すとおり、国民のほとんどはスペイン語の読み書きができなかった。また、1900年の人口調査では都市、農村の人口比率は都市28.3%、農村71.7%で、人口のほとんどは農村に居住していた。首都メキシコシティの人口は約40万人だったが、連邦区の識字率を見ると1895年に37.7%、1900年に38.55%、1910年に50.2%と全国の平均と比べてもかなり高い数字を示している。(Baranz;1993)また、小学校、中等学校数も多く、他の地域と比べ首都の繁栄のみが突出していることが見て取れる。ディアス政権下では、教育制度の骨格は作られたが、その恩恵に浴することのできる層は限られていたと言えよう。<sup>3</sup>

表 2 ディアス政権時代の識字率の推移

年度	識字率 (%)	男性識字率 (%)	女性識字率 (%)
1895	14.37	17.33	11.48
1900	16.06	18.92	13.25
1910	19.74	22.40	17.13

出典：Bazant;1993,95

## 2 . ディアス政権期の女性教育

### (1) ディアス政権期の女性の社会状況

1895年の人口調査によれば、労働人口4,704,848人（総人口12,700,294の37%）のうち、職業別の割合は、専門職1.3%、公務員・管理職0.8%、事務職0.7%、商業・行商人4.37%、農牧業63.5%、職人・工員21.1%、サービス関係7.9%、その他0.2%という割合であり、農牧業中心の経済構造に次第に産業化の波が押し寄せ始めた状況が見て取れる。（INEGI;1996,78）

この時代の大多数の女性は、農村に居住しアシエンダやランチョと呼ばれる大農園で家族労働に従事していた。一方で、ディアス政権の1896年から1910年の国内純生産は年2.84%の成長率を示し、産業成長率は年5.35%と高い経済成長を示している。都市を中心に産業化が進む中で、工業労働者として女性が次第に労働市場に参入してきた。こうした産業化の中で、女性が働くことのできた分野は、植民地時代からの伝統的な産業分野の繊維業とたばこ製造業が主で、それにマッチ製造業などの軽工業部門が加わった。林によれば、繊維業ではプエブラ州が総工場数の56%を占め、業界で働く女工数は1895年に30,395人、1900年には40,395人だった。1877 - 78年のメキシコ市の軍服縫製工場では、男性100人に対し女性200人が働き、女工の日当は平均0.75 - 1ペソで1日12時間働き、賃金が比較的高い場合でも工員の半分程度しか稼げなかった。（林；2002,42）タバコ製造業は、伝統的に女工が多い業種だったが、1901年メキシコ市のタバコ工場では、100銘柄のタバコが1分間に150 - 200本製造され、約1000人の労働者が従事していた。そのうちほとんどが女工で、低賃金の長時間労働を強いられていた。こうした状況の下で、

19世紀末には、縫製工場やタバコ工場でストライキがしばしば起き、賃金切り下げや待遇の改善のための陳情も相次いでいた。<sup>4</sup> また、売春も大きな社会問題だった。1904 - 06年度の公娼の割合は、女性人口の5 - 6%を占めていたが、このような境遇に至るまでの女性の職歴は無職21%、女中22%、お針子15%、繊維工場女工6.6%などで、貧困層の女性の雇用機会がいかに限られていたかを示している。

産業化の波は、工業労働者とともに管理部門や事務職のより専門化した労働力を必要とした。こうした社会の需要が、安定的な労働量を生み出すための教育制度の確立と中間層を生み出していった。しかし、中間層の女性にとって経済的な自立を可能にする職業は非常に限定されており、その中心となる労働分野は教職だった。

## (2) 女子公教育の発展

### ディアス期以前の女子教育

スペインからの独立後、1867年に自由主義派の大統領フアレスにより教育改革法 (la Ley de Reforma Educativa) 1869年に女子中学校設置令が公布され、最初の公立女子中学校が設立された。1870年には、ユカタン州でリタ・セティナ=グティエレスにより「むぎわらぎく」(Siempreviva) が女性の教育を目的に組織され、同名の私立女子学校が設立された。この学校は、1886年にはユカタン州初の女子中等学校に再編され、「女子文芸学校」となった。

1872年には、女子実業学校 (la Escuela de Artes y Oficios para Mujeres) が政府により設立された。実業学校は、13歳から29歳までが入学可能で、初等教育も提供していた。コースは自由選択ができ、貧しい生徒に食事を提供した。女子実業学校を紹介した雑誌『女性』(La Mujer) の記事 (1880年) によれば、首都に設立されたこの学校では、貧しい女性たちが自活できるように技術を身につけることを目的として、150名ほどの学生が在籍し、つづれ織、額縁の金メッキ、活版印刷の植字、飾りひもの製造、デッサン、絵画、製本、被服などの技術を学んでいた。(Rocha;1991,151)

### 女子の初等教育



1888年の義務教育法では、6歳から12歳の男女に初等基礎教育が義務づけられた。初等教育で教えられる教科としては、スペイン語文法、幾何学、算数、度量衡、メキシコの地理と歴史、体育があり、女子には手仕事、年長の男子には軍事教練が課された。1901年12月12日に出された政令（6条）によれば、高等小学校教育は4年で、始めの2年は、男女生徒に共通の教育内容を教え、後の2年では、男子は工業、商業、農業、鉱業の4つの科目、女子は工業、商業の2科目を学習できた。この教育は、労働者階級にも及ぶように、夜間小学校が設立された。

1905年に公教育文化省が設立されたが、新聞『祖国』（La Patria；1908年6月24日付）の誌上では、女子学校で理科・社会教育を教えるだけでなく、家政も教えるという公教育省のプロジェクトが紹介された。「学校を出るときに科学や芸術の知識をもつ上に、生活の場である社会における義務と権利を十分理解し、同時に家事義務を完全に意識し、それをなしとげる知識をもつべきである。つまり、結婚するにせよ独身でいるにせよ、なすべき役割をきちんと理解し、賢明にそれを読みとる家庭女性を学校で育成する。そのために、公教育文化省は、フランス、イギリス、スイスの家庭科教育を学ぶために、ヨーロッパに女性教師を送り、改革が行われるようにする。これは祖国の倫理的拡張の偉大な一歩であり、女性の尊厳に大きく貢献するものである。女性の知性を押し上げ、あらゆる専門教育機関への扉を開くように、既に、女子学校のプログラムは拡大された。最も女性らしい、女性の魅力を際立たせるものである家庭科教育の礎を置くことが必要である」と、記事は結んでいる。（Meneses Morales;1998）

### 成人教育と実業教育

1889年と90年の教育会議に基づき成人学校が組織された。実業学校や農業学校などの専門学校で成人の入学が認められ、初等教育も提供された。美術学校のデッサンのクラスはとりわけ人気があった。特に成人女性の教育については、昼間や日曜日に都合のつく1時間の授業や夜間授業が提供された。男女共学の成人学校が設立された。統一的な教科内容よりも、地域の産業や活動にあった技術教育、男性には政治・経済、女性には家政が提供された。

財源の不足から、授業は小学校教師が担当することが多かった。ディアス政権末の1910年には表3に示すように夜間学校が20州に設置されたが、女性のための夜間学校は男性あるいは共学の夜間学校に比べ8州にしか設置されていなかった。このうち連邦区にある夜間学校は男性30、女性16あり、連邦区中心の傾向が現われている。ついで多いのはベラクルス州の26で、ここは女性のための夜間学校あるいは共学の夜間学校だった。1892年の政令で、公立の成人学校は補償教育と補習教育に分かれ、前者では学齢期に就学しなかった人のために初等教育が、後者では労働者のための技術教育が行われた。

実業教育に関しては貧困層に有益な実践的教育を施すための実業学校が作られた。特に、女性のための実業学校は、当初は慈善的な意味合いが強かったが、次第にディアス政権の経済発展のもとで、より専門化した女性労働が必要とされてきた。1880年代には、書き方、算数、簿記、裁縫、刺繍、造花製作、歌、ピアノ、金メッキ、装丁、飾りひもの製造、印刷、つづれ織、絵などの講座が開講されていた。1891年からは、法務教育省の管轄となり、初等教育も提供された。また、女子師範学校にあった電話交換手、電燈製造、びっくり箱製造などの作業場が実業学校に移転した。女子実業学校では技術資格を付与したが、一方で女性にふさわしくない、あるいは経費のわりに報酬が少ないなどの理由で、金メッキ、時計、靴製造などのコースが閉鎖された。男子実業学校が女子実業学校より優遇され、当時10校あった実業学校のうち、7校が男性、3校が女性のためのものだった。

表3 1910年の成人実業教育

	夜間学校		実業学校
	学校数	生徒数	学校数
男性	120	8700	7
女性	54*	4595	3

\*ベラクルス州では共学および女性夜間学校しかなく26校で、この数字に含まれる。  
出典；Bazant, 1993, 123-4.

ディアス期には、産業化を背景に人的資源を早急に育成する必要から初等教育を受けていない成人のために教育および即戦力としての技術教育を中心とした実業教育が都市を中心に発展したが、その対応にはジェンダーによる差異が歴然としていた。女性の労働市場参加への道は、男性に比べかなり限られたものだった。

### 専門職教育と女子師範学校

ディアス政権期において、女性の上級専門職への道は、さらに限定されていた。1866年にマルガリータ・チョルネ=イサラサル (Margarita Chorné y Salazar) がメキシコ初の女性歯科医となったのを皮切りに、1887年にはマチルデ・モントーヤ (Matilde P. Montoya) が外科医、1889年にはマリア・サンドバル<sup>5</sup>が弁護士となり、わずかではあるが女性の専門職が誕生した。専門職教育に関しては、1897年から工学、法学、医学の専門教育の改革が実施された。しかし、1907年の時点で、メキシコ市の大学準備級 (preparatoria) 60校中、女性の入学を認めていたのは、13校のみだった。(Jaiven;1987) こうした中で、女性の進出が最も多い分野は教職だった。

1885年に師範学校令が公布され、1887年2月にメキシコ市に師範学校が設立された。1889年と90年の教育会議を受け、1889年に女子師範学校令が出され、1890年に女子師範学校が開設された。1869年に女子中等学校が作られた際に、すでに女子教員を養成するための教科が設置され、1878年の教育改革で教科が増加し、6年間の教員養成が行われていたが、専門職教育としての女子師範学校の開設は女性の社会進出に大きな発展をもたらした。

師範学校の入学資格は、14歳以上で、カリキュラムは1890年の教育会議の提案を受け、師範教育の養成期間が4年から5年間となり、科目数は40から25に減少した。男子の初等学校教員養成のための教科は、教育人類学、スペイン語、英語、一般文法と文学、平面と立体図形、自然史、物理、地理、市民教育、技術、歴史、政治・経済、論理学、簿記、デッサン、体育、学校衛生、フランス語、代数、幾何、直線三角法、倫理、習字、唱歌、教育学だった。軍事教練は特に言及されていなかった。女子師範学校の入学資格は、初等教育修了で、カリキュラムは、男子師範学校と基本的には同じだったが、

数学の学習が限定され、政治・経済の代わりに家政が加えられ、「女らしい」作業とピアノやメロディなどの音楽教育が拡大された。

表4に示した女子学校13校中ほとんどが女子師範学校で、そのうち3校は教職課程をもつ中等学校だった。教職課程以外の専門職教育がある女子学校はヌエボレオン州にある電話交換手と会計、オアハカ州のデッサン学校の3校だけだった。また、共学の専門学校の女子生徒の数は非常に限られていた。つまり、中等教育以上の教育を受ける女性の教育機会は、ほとんどが教員養成に限定されていたのが実情である。

表4 1900年の州別の専門職教育機関の分布

州名	学校数(師範学校または教職課程を持つ学校)	生徒登録者数				
		男子	女子	共学	男子	女子
アグアスカリエンテス	1(1)		1			94
カンベチェ	1(0)	1			45	
コアウイラ	1(1)			1	23	57
チアパス	1(0)	1			3	
連邦区	12(2)	6	1	5	3159	1322
ドルランゴ	2(1)	1	1		11	9
グアナフアト	2(1)	1	1		81	84
ゲレロ	2(2)	1	1		49	92
イダルゴ	1(0)	1			8	
ハリスコ	2(0)	1		1	103	3
メキシコ	1(0)	1			28	
ミチョアカン	3(1)	2	1		731	656
ネエボレオン	4(2)	2	2		77	178
オアハカ	2(0)		1	1	475	38
プエブラ	5(4)	3	1	1	202	421
ケタロ	1(0)	1			8	
サンルイスポトシ	1(0)			1	223	12
シナロア	1(0)	1			14	
タバスコ	1(0)			1	22	2
タマウリバス	3(3)	2	1		50	60
ベラクルス	6(1)	4		2	174	103
ユカタン	5(2)	3	1	1	88	686
ザカテカス	2(2)	1	1		46	133
総計	60(23)	33	13	14	5836	3950

出典；Bazant；1993,p.262-265から作成

表5 1900年の専門職

職業	全体数	女性の数
弁護士	3,742	2
業務代理業者	1,126	0
建築家	425	0
歯科医	309	3
薬剤師	1,518	13
エンジニア	2,719	0
親方	405	0
医師	2,602	24
同毒療法医師	230	0
公証人	409	0
獣医	287	0
仲買人	1,682	331
教師	13,345	6,841
総数	16,788	7,214

出典：Bazant;1993,p.267より作成

こうした教育状況の結果として、女性が社会進出できる分野は非常に限定されたものであり、表5に示したように1900年の専門職の中で最も一般的な女性の職業は教師だった。1878年には資格を有しない者も含めた教師の割合は男性が58.33%だったのに対し、1907年には男性が23.08%と女性が76.92%になっている。教職に対する女性の進出と教員養成教育の女性化は、男性教師に比べ女性教師は安上がりで、入学資格も初等教育修了であったため、少ない年月で多くの教員の養成ができたことも要因の一つだった。

社会進出の目覚ましい女性教員に対して、興味深い議論が新聞紙上で見られた。独身女性と既婚女性ではどちらが教育に適しているかというテーマで、日刊紙『自由党』(El Partido Liberal, 1894年9月14日付け)と『19世紀』(El Siglo XIX, 1894年12月4日と5日付け)の間で論争があった。前者は、既婚者は独身者より適しているし、修道女よりずっと適していると論じた。

「既婚女性は、子どもを愛するすべを知っているから、教育に従事するのにより適している。不幸なことに、既婚女性が教育することを禁ずる法律がある。経験的に教育はモラルと知識と献身を要求するが、

既婚者には最後のものが不足している。既婚者は、妊娠するし、さらに次々と障害がある。授乳期には子どもの面倒をみなければならぬ。もし、子どもの面倒を見ないなら、悪い母親であり、悪い母親ならばよき教師にはなれない。中産階級の女性には、未亡人、夫に見捨てられた状態、落ちぶれた場合のみ、様々な可能性が開ける。つまり、事務職、会計係、帳簿係、などであるが、しかし、教師ほど女性に適したものはない。教職以外の職業は、男性と女性が仕事場で一緒になるし、わが国の若者は「火が付きやすい」ので不都合である。だから、最も推薦できるのは教職である。」(Meneses;1998,532)

この頃から、女性の母性が職業と結び付けられ、母親となるか職業をとるかの選択を迫られながらも教職に職業としての母性を求める流れがすでに始まっていた。全国に統一的な教育制度が施行される中で女性の教育を受ける権利が認められ、女子師範学校や実業学校が作られる中で教育機会が提供されるとともに、学校制度の確立の過程でジェンダーによる教育の違いも次第に制度化されていった。

### 3. 女性の教育とフェミニズム運動

メキシコの初期のフェミニズム運動を支えたのは、教育を受けた、所謂、職業婦人、中間階層の専門職女性たちだった。それらの女性たちは、新しい生き方のなかで、理想とするこれからの社会について思い巡らし、その後、反ディアス再選運動を支持し、あるいは社会変革を求める運動に参加し、既存の女性のあり方に異議申し立てを行っていった。19世紀末から20世紀初頭は、フェミニズム運動の揺籃期とも言うべき時期であるが、教育がフェミニストたちの関心を最も集めたのもこの時期だった。専門職女性の中核を担った女性教員たち、中間階層の女性たちは、どのようにフェミニズム運動に関わっていったのだろうか。「尊厳獲得のためのフェミニズム」といわれるこの時期のフェミニズム運動の過程で、教育を要求した女性たちは、新たな社会状況においてジェンダーの境界にずれが生じる中での性別分業観をどのように構築し、教育の中に規範化していったのかを教育に携わる女性たちに焦点をあてながら考察する。

### (1) フェミニズムの潮流

1870年にメキシコ連邦区と連邦統治領（バハ・カリフォルニア州とキンタナ・ロオ州）ではナポレオン法典を基礎においた民法が制定された。この民法は、既婚女性に法的権利を認めず、女性の社会的劣等性を制度化し、女性の夫に対する市民的、社会的、経済的従属を規定した。妻は夫の許可なく契約や対外的活動ができず、未亡人となっても親権がなく、財産管理もできなかった。同法は、1884年に全国的性格を有する民法として公布された。

民法における女性の劣等性の刻印は、首都における産業化と経済発展の中で経済活動に参入する機会の増えた女性たちの前に立ちはだかった。一方、アメリカ合衆国やヨーロッパの国際的な女権運動の潮流は、こうした抑圧的社会規範を振りほどこうとする教育を受けた女性たちにとって、大きな刺激となった。1848年には、アメリカ合衆国ニューヨークのセネカ・フォールズ大会で女性の権利を要求する宣言が行われた。1866年にはジョン・スチュアート＝ミルがイギリス庶民院に女性参政権の請願書を提出し、68年には「全国女性参政権協会」がイギリスに設立された。1869年にはミルの『女性の隷属』、フランスのレオン・リシエールの『女性の権利』が出版された。アメリカ合衆国でも「アメリカ女性参政権協会」と「全国女性参政権協会」が設立された。1878年にフランスで「国際女性の権利大会」が開催され、1882年にはイギリスで「既婚女性財産法」が制定される。1904年に「国際女性連盟」が結成された。メキシコの教育を受けた女性たちがこうした世界的状況に影響を受けて、女性の劣等性を否定し尊厳を社会的に要求するフェミニズム運動が展開されることとなる。<sup>6</sup>

おりしも、メキシコでは近代教育制度の枠組みが形成されつつあり、国により召集された教育会議においても、「女性の教育」がいかにあるべきかが論議されていた。男性より劣等な存在として位置付けられ、法的にも一人前の存在として認められなかった女性が、この機にその「尊厳」を教育により裏付けようと考え、教育要求とともにそのあり方をめぐる論議に大いに関心を持つのは当然の成り行きであったといえよう。当時のフェミニストたちの言説において性別役割を積極的に肯定する姿勢が見られるのは、70年代の第

二波フェミニズムを経た現代の女性たちにとっていささかの違和感を禁じえないが、当時のメキシコにおける近代化の高まりと進歩のための教育制度の形成という状況の中で、フェミニストたちが積極的に女性の社会における地位を固め、教育制度の中に女性の社会における役割を制度化しようとした動きは時代の必然と言えよう。ディアス政権下のフェミニストたちの教育に関する論議を見ることにより、その過程を考察する。

## (2) フェミニズム運動を支えた女性たち

ディアス政権下では、民族資本と外国資本による産業化が進む中で、60年代半ばから産業労働者の機関紙が組合員の賛助金に支えられ発行されていた。<sup>7</sup> 1873年にマヌエル・アクーニャ (Manuel Acuña) やアグスティン・クエンカ (Agustín S. Cuenca) とともに、詩人アンヘラ・ロサノ (Angela Lozano) が雑誌『エル・ブカロ』(El Búcaro) を発行して、文学欄を担当した。こうした中で、女性誌も相次いで発行された。

1873年には、前述の女子実業学校から教師に抜擢されたコンセプション・ガルシア=オンティペロを中心として、生徒たち自身の手により『アナワックの娘たち』が創刊された。1883年にはスペイン出身のコンセプション・ヒメノ=デフラケル (Concepción Jimeno de Flaquer) が主幹となった『女性のアルバム』(El álbum de la mujer, 1883 - 1890)、ホセ=ドリアン・リコとドロレス・ヒメネス=イムロ (Dolores Jiménez y Muro) が創刊した『夫人通信』(El correo de las señoras) が相次いで刊行された。『夫人通信』の内容は、若い女性への啓蒙的エッセイ、流行、女性の投稿する詩や散文、料理、家事に関する有用な記事などから構成されていた。

また、アウレアナ・ライト=デクラインハンスは『アナワックの娘たち』を1887年12月に復刊し、1888年はじめに『アナワックのすみれ』(violetas de Anáhuac 1887-89) へ名称を変更した。デクラインハンスは、ゲレロ州のタスコにおいてアメリカ合衆国系の父とメキシコ人の母との間に生まれた。メキシコ市で英語とフランス語を家庭教師について学び、19歳で詩を書き始め、様々なジャーナルに寄稿している。

これらの女性たちは、『家庭日刊』(Diario de Hogar) や雑誌にも男女の平



等や女性参政権を求める記事を寄稿した。『アナワックのすみれ』において、デクラインハンスの後任主幹を務めたマテアナ・ムルギア=デアヴェレイラ (Mateana Murguía de Aveleyra) はメキシコ初の師範学校付属幼稚園の教員および園長を務め、1908年の師範学校令により設立された幼児教育学科の初代学科長に就任した。

1888年には『女性の声』が刊行される。1901年には、ミチョアカン州モレリアで、月刊誌『メキシコ女性』(La mujer mexicana) が創刊された。主幹は、出身地タバスコとメキシコ市で教師を務め、ジャーナリストとなったドロレス・コレア=サパタ (Dolores Correa Zapata) だった。1890年に女子師範学校付属小学校の副校長となり、多くの教育学関係の本を刊行した。コレアの執筆した『家庭婦人』(la mujer en el hogar) は小学校の家政科の教科書となった。

1904年には、ドロレス・ヒメネス=イムロが、マリア・サンドバル、ドロレス・コレア=サパタらとともに「女性支援協会」(Sociedad Protectora de la Mujer) を設立し、機関紙『メキシコ女性』(La mujer mexicana) を発刊した。1905年の「女性支援協会」会長となった、ラウラ・メンデス=デクエンカ (Laura Méndez de Cuenca) は、女子実業学校教師、トルカ師範学校教師を務め、国際教育会議でメキシコ代表として活躍し、1903年に師範教育の視察のためにパリに派遣された視察団にメンバーとして加わった。ラウレアナ・デクラインハンスも『メキシコ女性』に「教育による女性解放」を寄稿している。「女性支援協会」には、当時女性問題に目覚めた医師、弁護士、教師という専門職の女性たちが集い、教育がなく手に職を持たない大多数の女性たちを教育することが女性解放のための第一歩であると考え、技術習得のための実習工場の運営や下層の女性たちを救済する施設の運営を手がけた。

これらの女性雑誌はどのような層の人々を対象に刊行されたのだろうか。当時『アナワックの娘たち』は25セントボ、『アナワックのすみれ』は75セントボ、『メキシコ女性』は20セントボで販売されていた。同時期の軍服縫製工場で働く女工の労賃が一日70セントボから1ペソだったことを考えると、かなり贅沢品であり、購入することができるのは中流以上の層の女性た

ちだったと考えられる。また、当時の識字率および雑誌の普及条件などを勘案すると、メキシコ市を中心とした都市部で教育レベルの高い、すなわち初等教育あるいは女子中等学校レベルを修了した中流以上で、社会への意識も高い一部の女性たちを対象とし、情報交換と啓蒙的な役割を果たすものだったと考えられる。

一方で、貧しい労働者階級の女性たちと行動をともにする人々もいた。フアナ・グティエレス=デメンドサは、1875年にドゥランゴ州に生まれ、師範学校を卒業して教師となり、労働運動に参加した。15歳でグアナフアト出身の鉱山労働者と結婚し、やぎを売って印刷機を買い、グアナフアトで『宵の明星』(Vesper)を発行した。1902年にマゴン兄弟と知り合い、反再選運動の闘争のために投獄され、ドロレス・ヒメネス=イムロやエリス・アクニャ=ロセッティと獄中で知り合い、「クアウテモックの娘たち」を組織した。1905年には、「メキシコ社会主義」を設立、機関紙『アナワック』を発行した。1907年には、メキシコ自由党(Partido Liberal Mexicaca)の女性革命組織「アナワックの娘たち」が作られた。

時代をリードするフェミニスト女性たちの背後に、数少ない専門職である教職に従事する女性たちの支持があった。設立されて間もない女子中等学校や実業学校、師範学校において教育を身につけた女性たちは、ジャーナリズムを通じて啓蒙的な言論活動を展開するエリート女性たちが、教育を通じて女性尊厳を獲得し、女性を家父長制の抑圧から解放しようとする言説に大いに共感したであろう。また、『家庭夫人』『家庭日報』『アナワックの娘たち』『アナワックのすみれ』などの女性誌のなかで発表される女性の教育に関する意見は、メキシコの近代化と発展に貢献しようとする女性たちの関心を引いたに違いない。フェミニストたちは、女性の尊厳を獲得し、女性を解放するための教育をどのように思い描いていたのだろうか。次に、教育に関わる女性たちの言説からフェミニストにより構想されたジェンダー役割について考察し、当時の公教育とどのように関わっていたかを見てみたい。

### (3) 「尊厳のフェミニズム」と教育

「文学試論」という副題がつけられた『アナワックの娘たち』は、1873年

10月19日に刊行された。第1号は、4ページで「私たちの読者諸姉妹に告ぐ」という編集部の論説から始まり、3篇の詩（「希望」、「苦さ」、「ため息」）と5編の散文「一滴の雨」「神」「賞賛に値する行為」「ネツアルコアトル4世」「ポボカテペトル」そして実業学校学生のイラスト図案が掲載されている。「私たちの読者諸姉妹に告ぐ」には、実業学校で教育を受けて植字工として職業にプライドを持つ女性たちが、世間にその存在を知らしめるという気概が感じられる。文字を媒介に同じような境遇の女性たちとの連帯を求め、男性と同様の知的水準にあることを示しつつ、同時に「女性が物を書き、学習することを望むのですが、家庭を忘れてよいとは決して考えていません。」と結ばれているように、家庭に責任をもつ存在としての女性像を提示している。（Las Hijas del Anáhuac, 1873. 12. 19）

アウレアナ・ライト=デクライハンスにより復刊された『アナワックの娘たち』の趣意書には、「メキシコ女性誌を創刊することによって、ジャーナリズムを通じて女性の意見を全国的に表明すること」を通じて「女性教育の大いなる発展を促すため」と述べられている。祖国の発展と近代化に女性が貢献し、参加することが女性誌発行の動機であるとしている。（Las Hijas del Anáhuac, 1887. 12. 4）<sup>8</sup> 国家の近代化と男女の知的平等への関心が見て取れる。

女性の教育の必要性を説くフェミニストたちに、当時の一般女性たちの姿はどのように捉えられているのだろうか。「家庭の犠牲になっている女性」（Las Hijas del Anahuac;1873,10.26）「誕生の瞬間から賦与された権利を奪われてきた」「貧困、悲惨、愚弄に満ちた過去」（El Hijo del Trabajo;1876）「権利も代表権もなく、伴侶として選択する権利すら与えられなかった夫という名を冠する主人に仕えて死ぬより他は、未来も希望もない、不幸な奴隷」（El Hijo del Trabajo;1884）「パーティ好き」「若い女性にありがちな軽率さ」「華美な衣装への熱中」「家庭の守護天使」（*La Mujer Mexicana*;1904a）「もの同然に扱われる女性」（*La Mujer Mexicana*;1904b）これらの言葉から、既婚女性が家庭において夫に対し劣等な存在として位置付けられているという認識が見て取れる。デクラインハンスは、こうした家庭内における女性の地位を「教育による女性の解放」において次のように述べている。

「男性は、すべての理性的存在なら有する、考えて行動するという自然権を女性から剥奪しました。男性は女性にすべての知的職業への参入を拒み、女性を人から物に、実在から虚実に変えました。生存のための必要性にとりわけじかに対処する手段というものをおよそ女性から取り上げました。自然が女性に付与した平等を拒否し、社会的には父、夫、兄弟として女性を自分の召使と被保護者の役割に追いやりました。そうするために、男性は女性を知的に無知で精神的に弱いと責め立ててきました・・・

国政や社会で自身の義務を堂々と果たしてきた男性は、内なる家庭においても、母性という特権が女性に賦与する固有の権利さえも女性からあからさまに奪うことで、女性、すなわち劣等以外の何ものでもないと見なしている存在を隷属させてきたのです。男性は家庭で女性を夫人から召使に、伴侶から被後見者に、母親から子守りにしたのです。」<sup>9</sup>

さらに、保護してくれる家族のいない女性の場合、「女性が自身の存在と尊厳を救済するには、職業しかない」のであり、「夫婦の不測の事態に、すべての女性が尊厳を保ち、各々の出身階級から凋落することなくそれに耐えられるために、男性と同じように自立可能な方式の教育を教授されておいて欲しい」と述べている。「女性は、結婚していても未亡人同然の境遇で子どもたちを守るためにせよ、夫に正当な妻の扱いを要求するためにせよ、はては、一般的に女性が仕方なく甘んじている隷従から抜け出すためにせよ、個々の境遇に合った適切な教育を受けることが必要」であると論じている。そして、「家庭にこもる女性が、現在でもほとんど例外的にしか現れない尊厳ある女性の水準に立つためには、・・・教育の男女平等と権利の互惠性以外の手立てより他にない」と結論付けている。

当時において、経済的にも社会的にも女性の自立の道は閉ざされており、女性の生きる道は結婚しかないと考えられていた。しかし、結婚において、女性は「肉体的弱さと意見と判断力の不適格さ」という理由で劣等性を付与されることにより人間として尊厳を傷つけられ、さらに夫の家庭放棄や精神的、身体的暴力にさらされる女性も少なくなかった。社会的な活動の場と能

力の発展を拒否されてきた女性に、生活を支える術はほとんどなく尊厳から程遠い生活しかできなかった。一方で、結婚していない女性も現実にかなり存在していた。結婚という女性の規範的生き方から逸脱した女性たちは、低賃金で働くか売春婦として、さらに女性の劣等性を内在化せざるを得ない状況に追いやられた。

この状況を打開する手段としてフェミニストにより要求された女性の教育とはどのようなものだったのだろうか。女性誌からその言説を拾ってみよう。「両性は神の前に平等です。なぜなら神は、両性に知性を与えられたからです。平等であるが故に、神の前で同じ責任を負うのです。そのためには両性が同じ程度の教育を受けなければならないのです。」( *El Hijo del Trabajo*;1883)「女学校に少しの科学的な考えを導入しました。あらゆる科学的な考えを全面的に導入してください。」「知識面で女性が男性と同一水準に立って、初めて、現在まで否認されてきた声をあげることができるのです。」( *La Muejer Mexicana*;de Kleinhans;1905)

しかし、女性に男性と同じ教育を受けさせるべきであるという意見( *El Correo de las Señoras*;1884) に対して、「人間の各々の部分は十分に明確な目的をもっている。女性の役割は家庭の祭壇における根本的に重要なものであり、たとえどんなに重要に見えようとも女性に割り当てられたどのような活動も、家庭内のすばらしい義務に比べれば取るに足りない。・・・あらゆる方法を用いて、女性の教育は改善されるべきであるが、重要な真の女性の場所は家庭である」から、「単に教職につくためにだけでなく、家族の教育に身をささげるときに、女性に子どもを「教育する」ことができるような能力を与える教育が必要であり、従って男性同様女性も教育されるべきであるが、各々がしなければならぬ目的に応じて教育されるべきだ」という意見が表明された。( Rocha;1991,140)

おそらくこうした女性に対する「産む性」としての本質主義的な考えは、この時代に広く受け入れられており、当時のフェミニストはその宿命論の本質主義に反論するすべを持たなかった。むしろ、妻、母親としての役割を積極的に提示した。「女性の使命はますます果たすのが骨の折れる困難なものになってきています。ですから、母親は物理的、精神的なことに関する高貴

な教育に関心を持たなければなりません。よき妻、温かく知的な母親であるためには、この物理的、精神的な両方が必要です。」(「家庭の天使、母への手紙 女性の教育」、*Correo de las Señoras*, 1886. 6. 20)「女性自身、家庭という神聖な場所に相応しい地位を熟知している」(*Violeta del Anahuác*;1888)「モクテスマの地の女性は家庭の真の聖職者です」(*La mujer mexicana*;1904b)「賢明なフェミニストたちは男性化したいとは考えていません。・・・解放された母親から、人間の尊厳に関わる特権を主張して暴政に反旗を翻すことのできる、自由な男性が誕生するのだ」(*La Mujer Mexicana*;1904b)こうした女性の妻、母親としての生き方に対しては、結婚しない女性の存在、女性の人間としての尊厳を提示することで、反論を試みているものもある。「女性の未来は結婚だといわれているが、すべての女性が結婚するわけではないし、生活のために結婚することは正当ではないし、尊厳あることでもない」(*Violeta del Ahahuác*;1889)

現実には、当時の中産階級の多くの女性にとって生きるべき場所とされていたのは家庭だった。その結婚生活と家庭において、女性は法的にも人格的にも未熟で劣等な存在として扱われてきた。知的平等を達成することにより、家庭における女性の尊厳を獲得すること、そして結婚という制度から「逸脱」した女性が尊厳を持って生きられるようにすることこそ、フェミニストたちが教育に期待した役割だった。同時に、フェミニストたちは、形成過程にある公教育システムの中に女性の社会的役割を明示化することにより、市民権を制限されていた女性が国家の近代化の過程に参加する道を開こうとした。次に、フェミニストとして女子教育に携わったドロース・コレア=サパタを取り上げ、公民教育において女性の社会的役割はどのように提案されたかを検討する。

#### (4) ドロース・コレア=サパタと「公民教育」

ドロース・コレア=サパタは、1853年にタパスコ州に生まれ、学業を終えて若いころから教育と文筆に従事した。メキシコ市で10年間教職につく中で、科学的な特徴をもつ教育や国民教育に関するに記事を書き、文筆家としての名声を得た。1890年に設立されたばかりの女子師範学校の付属小学校副

校長に任命され、そこで道徳、公民教育、政治経済、理科などの教科を教えた。1886年に『家庭の女性』を、1895年に付属小学校の5、6年を対象として書かれた『メキシコ小学校のための道徳と公民教育』を出版した。『メキシコ小学校のための道徳と公民教育』は、1897年3月に女子小学校の4年生以降の教科書として推薦された。大統領への教科書推薦書には、「メキシコ女性をその美徳に相応しい地位に引き上げるための熱意は賞賛に値する」と



Dolores Correa Zapata

述べられているが、特に教科書で取り上げられている「愛国心」が高く評価されていることは注目に値する。

コレアの『メキシコ小学校のための道徳と公民教育』は、女子小学校4年生に向けて書かれた『道徳』、5年生向けの『公民教育』、6年生向けの『政治経済』が所収されている。すべて女性形のあなた方(vosotras)という呼びかけで始められ、女子小学校のために書かれていることが明確である。『道徳』は3部から構成され、1部は人間の普遍的な特徴、2部は人間と自然、3部は義務と慈善などの道徳に関して書かれている。内容は特に女性らしさを意識した記述はほとんどなく、性別となんら関係ない普遍的な内容が書かれている。明らかに都市に居住する裕福な社会層の児童を念頭に置いたもので、農村の貧困層の生活を連想させる記述は見られない。

唯一、女性らしさを意識した記述は、以下の人間の特質に関する「積極的勇氣と消極的勇氣に関する記述である。

「積極的勇氣は女性独自のものでもなく、また消極的勇氣ほど女性に必要なものでもない。義務の遂行と目的の実現に伴う弊害をじっと我慢すること、家族や祖国の内紛に精神の平静さを示すこと、社会の心配事に打ち勝つすべを知るとは、戦場に身を投じたり、軍隊で勝利を収めるよりずっと英雄的行為である。」(Correa;22)

『公民教育』は、第1部が祖国 愛国心と第2部が政治社会 祖国の法律から構成されている。第1部の1課 公民教育の意義と特質では、母親に公民教育の授業を受けないように言われた女子生徒のエピソードが紹介されている。「母親の意見によれば、この授業は役に立たないばかりではなく、女性をだめにする。」(Correa;124) また、女子学校に公民を置くことに対する啓蒙的な男性からの揶揄も紹介されている。こうした意見に対し、コレアは、「公民教育は愛国心を育てることを目的とする」そして、「愛国心は家族愛の延長上にある」「・・・家族への愛情と愛国心が緊密につながっている・・・」(Correa;125) と述べ、「家族を幸せにできる少女は、将来は祖国を幸せにする」として、家族の延長上に国家があり、女性は家族愛を通じて国家に奉仕する男性を育てることで、国家の発展に参加できる、と展開する。

「たくさんの家族が集まって祖国を作る。祖国は大家族と考えるべ



きである。」「親は子どもに教育を受けさせる義務がある。子どもを教育することにより母親や姉妹は兄弟の手本となって、よき市民を作る事により祖国に貢献できる。」(Correa;134 5)

さらに、女性の愛国心の例としてホセファ・オルティスやレオナ・ピカリオをあげている。また、フランスの侵入のときに、ある女性教師が侵入者による公立学校の指導を拒否し私立学校を設立した事例をあげるなどメキシコ史に登場する女性を紹介し、メキシコ女性を取り上げたデクライハンスの著述を高く評価している。(Correa;145)

第2部の政治社会は、「法によって統治される国民を形成」するために、メキシコの政治組織、法律に関する知識が記述されている。

『政治経済』の内容は、ほとんどがメキシコの法律と経済、産業に関する知識が提供されている。民法上、既婚女性に法的権利を認めず、女性は夫の許可なく契約や対外的活動ができず、未亡人となっても親権がなく、財産管理もできなかったにもかかわらず、女性形の「あなた方」という呼びかけで書かれている教科書は、「富の生産」「労働分業」「富の分配」「銀行と信用貸し」「国家財政」などについてメキシコの国家と経済の仕組みが記述されている。

公民教育に見るコレアのメッセージには、女性が公民権の内容を男性と同等に理解することにより、家庭と子どもへの影響力を通じて社会に影響力を及ぼすという姿勢をみてとることができる。公立学校において女性が受ける教育は、男性と同じ知識内容であり、家事や伝統的に女性に割り当てられた従来の性別役割に特化されたものではない。そこには、女性が男性と平等の市民権を得るという来るべき時に備えて女性を教育しようという意味と、家庭を基盤として女性の社会的影響力を獲得し社会的地位を確立しようという、当時の女性の限定的な状況から出発した認識を見ることができる。最後に、教科書は「家庭への影響を通じて、女性の影響力が人類、そして特に祖国への影響を与えることが貫徹させられるように」(Correa;225)と結ばれている。

## 結び

近代化を目指すメキシコ政府は、女性の社会的役割について模索し、近代公教育に制度化しようと考えていた。一方、法的、社会的に市民権を制限されていた女性たちは、教育を通じて家庭における劣等的地位を振り払い平等と尊厳を獲得し、さらに家庭を基盤にして社会への参加の道を切り開こうとした。当時、教育を受ける機会に恵まれたエリート女性たちは、女性に可能な限られた専門職として教職に進出していた。たとえ中産階級であって経済的に教育機会への参入が可能だったとしても、学校教育を受けることは、都市に住むわずかな女性たちの特権であり、その将来の選択肢は限られており、結婚以外にほとんどなかった。こうした状況の中で、結婚生活では非対称的な権力関係が支配し、女性は家庭内における劣等性を意識せざるを得ない状況にあった。フェミニストたちにとって、限られた労働市場において女性の経済的自立を主張する以前に、大多数の女性たちの現実である家庭での被抑圧的、劣等的地位からの解放が先決だったのではないだろうか。トゥニョンは、「これらの（フェミニストの）教育家やジャーナリストは女性のアイデンティティについて語っているが、それはいつも抽象的な「女性」であった。・・・そこには、具体的計画や構想を見出すことはできない。」（松久；22）と述べている。しかし、70年代のフェミニズムを経た視点からは本質主義の足かせにとらわれているかに見えるものが、実は当時のフェミニストの現実的な戦略であり、近代国家の求める女性の社会的役割を積極的に女性解放に利用したのではないだろうか。

フェミニズムが社会運動のひとつである以上、普遍的なフェミニズムを追求することは不可能であり、運動そのものが本質主義に陥る可能性を含んでいる。歴史と社会関係の中で、ジェンダーの境界は揺らぎ差異による権力関係もまたその構成を變形し続ける。19世紀末におけるメキシコのジェンダー関係は、男女の差異、つまり本質主義を所与のものとしながら、既存の家庭内における権力関係を「差異の上の平等」（Igualdad en la diferencia）という新たな概念によって作り変え、家庭を女性の「聖域」にすることにより女性の「尊厳」の砦とし、教育を通じて「家庭」から「国家」に影響を及ぼすと

いう社会的役割を積極的に取り入れた。それは、市民権を制限されていた女性が、法的平等により市民権を完全に行使することを要求する戦いへの前哨戦だった。

## 注

1 既にいくつかの州では、師範学校が設立されていた。1848年にはサンルイス・ポトシ州で共学の師範学校、1881年にはグアダハラハラ州で州立師範学校、1879年にはプエブラ州で1880年にはヌエボ・レオンで、1886年にはベラクルス州に師範学校が設立された。また、ディアス政権期に先んじて、1867年には大学準備級 (Escuela Nacional Preparatoria) に教員養成のための特別講座が設けられていた。同時に設立された女子中等学校は、1878年に教員資格を授与できるようになった。

### 2 会議で出された統一見解

民衆教育に関する国家制度は可能にして適切であり、義務かつ無償かつ世俗的 (非宗教的) なる初等教育の統一を、原則として認める。

初等基礎教育は6歳より12歳までの年齢において与えられなければならない。無償の初等基礎教育は4年制課程もしくは前期4年間を含むものとする。

義務初等教育の一般計画は統合 (integral) 教育とする。(皆川; 1975、Larroyo; 1976)

3 表2はBazantが読み書きできる、読むことだけができるに分類したデータのうち、読み書きできる割合を記載した。読むことができるを加えると2~3%の増加が見られる。また、INEGIのデータによれば、1895年18.3%、1900年24.7%、1910年29.3%とBazantより高めの数値が報告されている。(INEGI, *Estados Unidos Mexicanos, Cien Años de censos de población*, México, 1996.)

4 1881年に3つの織物工場でストライキが起きた。1885年にタバコ工場で、工場側が労働協約を破棄したことに起因したゼネストがおき、20日間ストは続いたが失敗に終わった。

5 後に、サンドバルは、ドロレス・コレア=サバタ、ドルンバ・リベラとともに女性支援教会を設立した。

6 特に、ミルの影響はメキシコでは大きく、ミルを引用した「差異の上の平等」を取り上げた論文がコンセプション・ヒメノ=デルアケルによって『メキシコ女性』に書かれた。

7 1867年『職人』、1869年『人民の友』、1872年結成の「メキシコ労働者集団」の機関紙『社会主義者』(1872-74)や『労働者の子』などがあつた。

8 松久玲子編『メキシコ的女たちの声』資料集より引用。

9 松久玲子編『メキシコ的女たちの声』77ページより引用。

## 参考文献

- 国本伊代編、(1985)『ラテンアメリカ 社会と女性』新評論。
- 国本伊代、(2002)『メキシコの歴史』新評論。
- 松久玲子編、(2002)『メキシコの女たちの声 メキシコ・フェミニズム運動資料集』行路社。
- 皆川卓三(1975)『世界教育史体系19 ラテン・アメリカ教育史I』講談社。
- 林美智代  
 (2002)「復興共和国とボルフィリオ・ディアス期 [解説]ディアス期における女性運動の始まり」、松久編『メキシコの女たちの声』、行路社、p.32-48。  
 (2004)「近代メキシコ労働運動と女性労働者」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)第72号、p.27-81。
- Bazant, Mílada, (1993) *Historia de la educación durante el porfiriato*, El Colegio de México, México.
- Correa Zapata, Dolores, (1898) *Moral, Instrucción Cívica, nociones de economía política para la escuela mexicana*, Librería de la Vda. de Ch. Bouret, Mexico.
- El Correo de las Señoras,  
 (1884), José Ma. Vigil, “Educación de la mujer”  
 (1886.6.20),” Angela de hogar, una carta a su madre”, año V.
- El Hijos del Trabajo*,  
 Juana la progresista, “La emancipación de la mujer”, año1, vol1, núm.6, 1876.5.22.  
 Montero, Julia, “La esclavitud de la mujer”, año9, núm.413, 1884.7.27.
- Las Hijas del Anahác*, “A nuestra lectoras” Tomo1, Num.1, 1873.10.19, México.  
 “La mujer”, Año L, TomoL, Núm.10, 1887.12.4 ,México.
- Infante Vargas, Lucreia, (2001) “igualdad intelectual y género en Violeta del Anahác. Periódico Literario Redactado por Señoras, 1887-1889”, Cano, Gabriela y Valenzuela, Jósé Georgette coor. *Cuatro estudios de género en el México urbano del Siglo XIX*”, PUEG, México.
- Lau Jaiven, Ana, (1987) *La nueva ola del feminismo*, Planeta, Méxoco.
- Larroyo, Francisco,(1976) *Historia Comparada de la Educación en México*, Editorial Porrúa, Mexico.
- Martínez Jiménez, Alejandro, (1996) *La educación primaria en la formación social mexicana 1875-1965*, Universiad Autónoma Metropolitana, Mexico.
- Meneses Morales, Ernesto, (1983) *Tendencias educativas oficiales en México 1821-1911*, México.

*La Mujer Mexicana*,

a Jimeno de Fraquer, Concepción,( 1904.6.1), Tomo.I,núm.6,

b - (1904.11.12), Tomo.I, núm.11.

Wright de Klien hans, Laureana, (1905), “La emancipación de la mujer por medio del estudio”,

(1907).1Tomo IV,

Ramos Escandón, Carmen, (1987) “Señoritas porfirianas; Mujer e ideología en el México progresista, 1880-1910”, *Presencia y Transparencia*; La mujer en la historia de México, El Colegio de México, México.

Rocha, Martha Eva,(1991) *El álbum de la mujer, antología ilustrada de las mexicanas, Vol.IV/El porfiriato y la Revolución*, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.

Tovar Ramírez, Aurora, (1996) *Mil quinientas mujeres en nuestra conciencia colectiva*, Documentación y Estudios de Mujeres, A.C., México.

Tuñón, Julia, (1991) *El álbum de la mujer*, vol.III El siglo XIX(1821-1880)INAH, México.

Violeta del Anahuác,

(1888.2.26), Zapata de Puig, Catalina, “La Mujer de este siglo”.

(1889) Morales, Carolina, “El Trabajo”

### 女子教育年表

- |          |   |
|----------|---|
| 1867年    | ファレス大統領就任 公教育組織法発布  |
| 1868年    | 女子中学校設置令公布  |
| 1870年    | ユカタンでSiempreviva発刊、同名の女子私立学校設立  |
| 1872年    | 女子実業学校設置  |
| 1873年    | 『アナワックの娘たち』( las Hijas de Anaguác )   |
| 1877年    | ディアス大統領正式就任   |
| 1885年12月 | 師範学校設立令施行   |
| 1886年10月 | 組織規定。設立のために5万ペソが支出。<br>ユカタン州に女子文芸学校設立「麦わらぎく」( Siempreviva )が公立女子中等学校に再編された。 |
| 1887年    | 『アナワックの娘たち』復刊、翌年、『アナワックのすみれ』( Violetas de Anahuác ) に名称変更                   |
| 1887年2月  | メキシコ市に師範学校開設。付属小学校および幼稚園が併設。  |
| 1888年    | 義務教育法 ( Ley de Instrucción Obligatoria )                                    |
| 1889年    | 女子師範学校設置令   |

- 1890年      メキシコ政府、ランカスター協会を解散。
- 1891年 3月   連邦地区および諸地方における義務教育施行規則  
Ley Reglamentaria de la Instrucción Obligatoria en el D.F. y Territorios視  
学制度の確立
- 1889年      第1回教育会議（Congreso de Instrucción）
- 1891年      第2回教育会議（Congreso de Instrucción）
- 1901年      連邦区で看護学校開設、女子技術専門学校で電信、速記コース開講
- 同年       『メキシコ女性』（La mujer mexicana）発刊
- 1902年      女子商業学校開設
- 1911年      ポルフィリオ・ディアス退陣
- 1916年 1月   第1回フェミニスト会議
- 12月   第2回フェミニスト会議
- 1921年      公教育省の設立
- 1922年      エクセルシオールが母の日を祝うキャンペーンを実施。  
（ユカタンの出産管理に反対するキャンペーンとして）  
汎アメリカ大陸女性同盟、フェミニズム会議第1回大会
- 1931年      マルガリータ・ロブレス『メキシコにおける女性の発展』  
第1回女工・農民女性労働者会議
- 1933年      第2回女工・農民女性労働者会議
- 1934年      第3回女工・農民女性労働者会議

## La mujer y la educación pública del régimen Porfiriato en México

Reiko MATSUHISA

Bajo del régimen Porfiriato(1876-1910), México por primera vez tuvo la experiencia de la larga estabilidad económica y política, aunque la aguda desigualdad se veía en la distribución de riqueza. En esta época la modernización del país fue promovida por “los científicos”, los burócratas ilustrados, y estableció el esquema de la educación pública moderna. La

educación femenina avanzó estableciendo las escuelas normales femeninas en aquel entonces. Al mismo tiempo se discutieron cómo era la educación de las mujeres.

Con el avance de la educación femenina, surgió un grupo de mujeres educadas. Pero el mercado del trabajo para estas mujeres fue limitado. La mayor parte de ellas se hicieron profesoras. El gobierno mexicano con vistas a la modernización del país buscaba el papel social de mujeres y trataba de introducir esta idea en la educación pública.

Por su parte, las mujeres, cuyo derecho civil y jurídico era limitado, buscaban recuperar su dignidad en el hogar para superar la inferioridad a través de la educación. Con base al hogar donde las mujeres desempeñaban el papel como madre, trataban a abrir un camino para su participación cívica social, lo que para nosotras que hemos venido más allá de la segunda ola del feminismo parece retrazada como el esencialismo de género, pero por aquellos días “Igualdad en diferencia” era la estrategia más práctica para cambiar las relaciones de poder en el hogar y participar en la sociedad cívica desde el hogar.

Estos esfuerzos se notaba en las actividades de las profesoras de aquella época, cuyo ejemplo es la elaboración del texto de la educación cívica escrita por Dolores Correa Zapata. Las mujeres mexicanas de esta época no solamente fueron integradas por el Estado pasivamente como “ángeles del hogar”, sino también buscaba positivamente su papel social en el Estado a través del hogar donde establecieron la dignidad mediante la educación, ejerciendo su influencia en el gobierno.

The Women and the Public Education at Diaz's Regimen in Mexico

Reiko MATSUHISA

Keywords: mexican women, modern public education, feminism